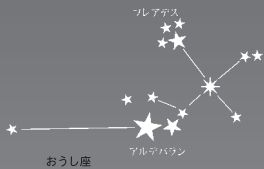


ポラリスを仰ぐ北の大地から



去年の漢字

札幌医科大学医師会 会長 山下 敏彦

年の瀬の京都清水寺で発表される恒例の「今年の漢字」、2014年は「税」であった。ここ数年の漢字、「絆」「金」「輪」などに比べると、あまり良いイメージの字だとは言えないが、2014年4月に行われた消費税率8%へのアップが選定の大きな理由であろう。

さて、この増税の煽りを最も顕著に受けているものの一つが病院経営である。とくに大学病院などの大規模病院ではその影響は極めて大きい。札幌医科大学附属病院では、1ヵ月の医薬材料費は約7億円なので、3%の消費税率アップにより月々2千万円以上、年間にして2～3億円の支出増となってしまう。さらに電気・ガス料金値上げによる光熱水費の上昇分が加わり、支出増は一層深刻なものになっている。一方、消費増税分を上乗せして改定されたはずの診療報酬は、とうていこれらの支出増をカバーできず、実質マイナス改定となっている。

収支状況の悪化により、病院は新たな設備投資を圧縮せざるを得なくなり、また高額医薬品、医療材料の購入は抑制され、医療の質の低下、さらには萎縮医療につながることも危惧される。一方、収支改善のため、さらなる稼働アップへのプレッシャーが強まり、職員の疲弊を助長するばかりか、医療事故発生の危険性も高まる。

国公立の大学病院といえども、近年は経営努力が求められ、さまざまな改善・変革がなされてきた。しかし、このようなさらに厳しい状況の中に置かれ続けられれば、大学病院は、本来の使命である先進的医療の推進や未来を切り拓く新たな医療の開発といったものに行き詰まるか、もしくはそれらを放棄して単に利潤をあげることを目的とした大病院への道を歩むことにもなりかねない。今年度の収支決算が終わり、日本全体における問題の全貌が明らかになった時点で、今一度、徹底的な問題点の検証と改善策の検討が行われることを望みたい。



ヨーロッパスキー旅行

石狩医師会 会長 我妻 浩治

年末年始を利用してヨーロッパアルプスへ、スキー旅行に出かけた。3回目の旅となるが、今回でおしまいと思う。もう12時間も機内に閉じ込められるのはやりきれない。1回目は6年前、札幌市医師会のスキークラブの先生たちとご一緒に、スイスのツェルマツを拠点に名峰マッターホルンの麓を滑った。雄大な景色と氷河、3,800mでの軽い高山病に悩みながらも初めての経験を満喫した。2回目は3年前、オーストリアのバドガシュタインという古い温泉地を拠点に、周囲のスキー場をまるで学生時代の合宿のように滑りまくった。この年オーストリアでW杯が行われており、会場となったシュラートミングという有名なスキー場も滑ったのを後になって知った。3回目の今回は、イタリアのクールマイヨールという街を拠点にしたが、ここも名峰モンテ・ヴィアニコ（通称モンテ・ローザ）の麓にある。毎朝朝日に染まるモンテ・ヴィアニコは、格別なものであった。毎日快晴の天気にも恵まれ、近郊のスキー場を滑り、遠くに見えるマッターホルンやアルプスの峰々に圧倒され、スキー遠足と称し国境越えしフランス領ラ・ロジュールへ昼飯に、最終日にはマッターホルンをイタリア側から見るチェルビニアまで遠征し、盛りだくさんのスキー旅行を完全制覇した感がある。

今回の旅行を終えて感じたことは、とにかくヨーロッパのスキー場は混んでいるということだ。年末という時期もあるのか一時の日本のバブル期のスキー場を感じた。また各世代の人たちがそれぞれの方法で楽しんでいる。子どもも多かった。インストラクターも多いのか、小学生低学年5～6人のグループでトレインで滑っている。ヘルメット着用の完全装備だ。オーストリアではスキーが国技だという。子どもたちにスキーを教えるのは義務でそのための休暇もあるという。今回ガイドの人に言われた。子どもたちには注意して、決して接触しないようにと。随分と子どもたちが大切に育てられていると感じた。少子高齢社会と言われている日本だが、心も体も強い子どもたちを育てていかなければならないのに、保育園ができると言って文句を言っている人たちがいるというのは、いかがなものだろう。